

異種百人一首序説

伊藤嘉夫

和歌の聚合性と百首

短歌が三十一音の定型律詩として、極めて小さな体格を持つことは、遁がれ難い宿命である。芸術は極めて小さな体格に対しては、その存在を拒否しがちである。絵画にしても方寸の作品で名画を称するものはあるまい。男の和装の唯一の装飾品であった根付にしても、かつては根付製作の名人があり、江戸末期には三千人を越す作家があつて、その名作は芸術品として珍重されていたが、それは、有用の規絆に支えられてのことであつて、用途を失つた今では、骨董品として好事家の手に眠らねばならぬ運命となつたのである。

短歌が呼びかけあいの中に生れ、呼びかけの使命をはたせば、それで役目は終焉するのであるが、呼びあう二首の短歌がかもす、叙述性が物語の中に身を埋めて、その核心としての生命を、その物語と共存させることもあるが、短歌が文芸意識をもって、自然観照や独自の作品を生んだ場合、一首の歌が、物語や日記文学等の散文々芸に立ちむかつて、存在を主張するに

は、その体格があまりに小さすぎるのである。植物にある頭状花序の向日葵や菊は、その一花は一弁のみすばらしい存在であるが、数十数百の個々の花が聚つて一輪のごとく、華やかな姿で、一花一輪の花に互して豪華をほこるのである。弱き者小さきものの集団による自然の力としてのあらわれは、短歌においても例外ではないと云えよう。

万葉集や古今集、山家集などの独り歩きの出来るのはこの理に外ならない。万葉の歌は万葉集から抜きいでて鑑賞され、西行の歌は山家集から引かれて味わわれるのである。

短歌が歌物語の中に、核心的に存在するのは一種の自己増幅である。又屏風歌のごとく、絵や、書道と結んで、装飾芸術の中にあつて自己主張をしたり、連作、群作の鎖につないで、集団の力を發揮しようとする。またサロン芸術としての歌合の場を持つて、結集されて、共鳴の興味を与えつつ存在するのであつた。然し、何といつても、多人数作者の歌を結集した撰集や、同一作者の歌を集めた私家集や、歌合の結集されたものとなつて、はじめて物語や日記文

学などに互して、文芸作品としての量感を主張することが出来のである。

然し、私家集や撰集の読者は、物語や日記文学の読者が、筋や内容の展開につれて読み進む場合、それが相当の分量にも堪えるのに反して、短歌が一首づつに完結しながら移つてゆくことによる量感の重みとはちがう。この重みは長時間の緊張には必ずしも堪え易いものではないのである。

夫木抄の一七三五二首や、千五百番歌合の三〇〇〇首などは、一気に通読し得るものではない。これらは、記録性や辞書性に支えられているもので、この量は文芸享受者に示す短歌作品の適当な様式ではない。

文芸作品はつねに享受者を考えにおいて提示されねばならない。目安としては、読みやすいという量が自然に考慮される筈である。従つて、読まれる短歌集の内容とする歌数は程々でなければならぬ。歌人の中にわりあい流布した三十六人集は総歌数三九四九首、平均すると一人の作者の歌数は一〇九首になる。各作者の歌数はまちまちであるが、一気に読まれるのに

適当な歌数を考える上に一つの参考になる。百首に近い数値である。そこに、人間生理への順応があると思われる。百首程度が享受者にとって適量であると共に、百首という量は、作者にとつても、一応の力量を示し得る分量に近からう。

百は、はじめて三けたになる整数であり、觀念を結びやすい所から、百面相、百貨店など、多数をあらわす語彙に用いられるが、実数を百としたいわゆる「百首歌」は、平安中期にはすでに行われていた。「百首歌」の源流は、曾祢好忠あたりであろう。「百首家集」と云った構想で、古今集の部立の様式を襲っている。好忠のは、四季恋沓冠物名の部立、詞書を一切掲げない。これは短歌の表出に対しては最も純粹な態度である。詞書に支えられる一切の情趣などを切りすて、一首づつの短歌を、丸はだかで見賞にさらすのである。のびきならない一首の持つ価値、作者の力量を見せるものなのである。好忠の「百首歌」は、そうした自信の中に成立し、当時としては評判になったものと見え、源順のかへしの「百首歌」、惠慶の集にも「これはよの中に曾祢好忠という人のよめるももち歌の返し」として、「百首歌」をよみ、序の中にも「あるふんやわらはあざな聖寂といふ人、同じももち歌をおなじ心によみつづけ」と、好忠の百首に向へた百首が詠まれたことを云っている。重之集にも詠んで奉ったという百首が見え、和泉式部集にも見え、相摸集には百首が二組と箱根の僧の百首が一組ある。

これらは「百首歌」の古いものと思われる。ことに曾祢好忠のように、詠風にも異色を出そうとした作者が、詞書を除いた和歌の裸身のまをさらし、技法の上に制約をつけた、沓冠、物名を展開して、歌作の力量を示そうとした意欲が、幾人かの対抗的に詠む人々を生んだことは、新しい様式に対する世評のあらわれの一端とも思われる。それが一つの歌壇の底流になって、山川のさざれ水の如く、ひそかな音をたてはじめたのは平安中期である。千頼集のごとくほとんど百首に近い(一〇四首)歌が、一切の詞書を省き春夏秋冬恋雜の部立にあたる題だけおいた集も、原型はおそらく百首であったか、百首への草案であったかとも思われる。海人手古良集も、詞書なく、春夏秋冬は各二〇首というように歌数を揃えたのも、百首歌意識が見える(九五首)。また、保憲女集、重之女集など詞書を付けないもので、部立名にわかち数を限ったものも、もと百首歌であったが、これまた百首歌への草案であったかとも思われる。

堀河天皇が康和年中に、当代の歌人、公実、匡房、国信、師頼、顯季、源顯仲、仲実、俊頼、師時、藤原顯仲、基俊、肥後、紀伊、河内、等に百首歌の詠進を召された「堀河百首」は、百首歌盛行の時代を劃すもので、組題百首の初めとされる。行宗、忠盛、六条院宣旨、公重等の家集には百首歌を収めるばかりでなく、恨躬恥運雜歌百首を収めるばかりでなく、百首にふれる詞書が家集に八十ヶ所以上見える。有名な忠度百首は少し形がくづれて詞書を蒼

んだ歌をも収める。かくて、平安中期にさざれ水のごとく出現した百首歌は、細流を集めた本流の滔々とひびきをあげるとく、平安後期から鎌倉期にかけて、燎原の火となって、たちまちに歌壇に蔓延した。たとえば六家集の各集についてみると、長秋詠藻四、月清集八、参玉集三三、拾遺愚草二一、壬二集一〇、山家集二。ことに拾玉集は、総歌数、約四〇〇〇に対して八〇%の歌数が百首歌によって占められている。定家は「初学百首」以来生涯百首歌を詠んだ。西行が、俊成、家隆、定家、慈円、隆信、寂蓮などをはじめ、人々に勸進して、「二見百首」を請い伊勢神宮に奉納したのは諸家の集に見える所で、寂然、公衡、式子内親王、殷富門院大輔、隆房などの家集が、百首歌の一つから三つを以て構成するものもある。中には、隆房集のように、ことごとく詞書を添うものは例外である。題以外の詞書を添わない百首歌が本格のものである。かくておおよそ歌を詠むほどの者は、百首歌を詠まないことは無かったと云っても過言ではない程となった。

定数歌形式に於いて、百首歌こそその王座を占めるものとして、この後も長くその伝統をつたえた。五十首歌、二十首歌などは多く当座の詠であり、五十首ではやや物足らず、三百五首では多すぎるのである。(鷹三百首など流布しているけれども)一つの様式があらわれ、その様式が妥当のものであれば、様式内容に工夫が加えられつつ、基本の様式は守りつづけられるのである。外形は百首の限定を持って、内

容は歌集的组织による構成に充足した百首歌、堀河百首のように組題形式をとるようになるものが出現しても、これは規範として、百首歌をしぼるものにはならなかった。初源に立ちもどった百首歌集が多く行われたけれども、原則として詞書を省いた、歌を歌そのものとして表出する原則は守られて来た。更に、歌の様式を限定した、百字百首のように、句の上に「あさがすみ」「うめのはな」など百字をすゑて詠むものや、花月百首述懐百首、厭離百首、釈教百首などのように全体を一つのテーマにして詠んでいるものも見え、鷹百首、鹿百首など詠物の百首もあらわれた。室町に入っても、百首歌の灯は詠みつがれたのであった。江戸に入っても、契沖に富士百首があり、「花月百首の中に」「はじめて詠みける百首の中に」その外百首にふれた詞書が多い。茂睡に隱家百首があり、春海は百二十首歌を作っている。幸文に組題百首、貧窮百首がある。ことに貧窮百首は有名である。幸文にも学んだ小野務は、十種以上の百首歌を遺している。中にも浄瑠璃百首は稀しい。近代に入って、大磯百首(信綱)百中十首(子規)などあり、昭和初期に「短歌研究」誌上に、当代歌人の百首歌を多く載せた。

百人一首様式の創始

定家は、十八歳で初学百首を、十九歳で堀河題百首を詠んで以来、二十一組の百首歌を、その家集拾遺愚草並に員外にとどめている。然し百首歌を主んじたことは、拾遺愚草上巻は、初

学百首以下、七十歳に詠んだ、最後と思われる貞永元年四月の関白左大臣家百首までの、十五の百首歌のみ、あわせて一五〇〇首を収めている。更に中巻には五十首歌等定数歌と屏風歌を集め、下巻にはじめて部類歌を収めている。員外においても、「一字百首」「一句百首」「文集百首」「四季題百首」「堀河題百首」「藤川百首」のほか、句の上には四十七字を据ゑて、良経と贈答したもの、越中侍従のに返した今一組、文字くさり二十首、更に三十一字歌、三十三字(いまこむといひしばかり)歌、南無妙法蓮華経の十三字の文字くさり、(以上二百首、実は二〇七首)を収めている。少し詳しく云えば、一字百首は、句の上に「あさがすみ、むめのはな、たまやなぎ、かきつばた」の二十字を据ゑて春二十首、同様四季雑二十首つつ詠む。同様なもの、いろは四八字歌などには「やがて奉りし」とか「とりあへざりしいたづらごとく」とか、「この歌をかみにおきて、今と侍りしかば使につけてまいらせし、今見れば歌にもなかりけり」「みだりがはしさも中々やうかはりてやとて」など書き添えて芸の遊びをはにかんでいるが中々の秀詠もあるが、愚草に加えなかつたこともうかがわれる。

定家が、自分の作品を遺そうとして自撰した拾遺愚草及員外をまとめた内容を見ると、拾遺愚草上中下二七九一首(他人の歌を含まず)と員外八七〇首のあわせて三六六一首中二十一の百首歌は、歌数で六〇%以上になり、定数歌中巻の五二五首をあわせれば、百首及定数歌の率

は七〇%にもなろうとする。

茲には定家の歌に対する考えをうかがうことが出来ると思う。定家は短歌作者として、短歌が、独立して、詠出の場とが背景からはなれて、一人歩きの姿で享受さるべきものであるとつねに信じていたのであると思う。それゆゑに、短歌の表現は、歌合せとか百首のように詞書を脱した裸のまま、文芸の虚構の中に表現の自在をかちとろうとしたのであった。さればこそ詠出の場を明らかにしない歌合せとか百首による表現に生命を傾けたのであった。当時盛んに行われた歌合の作者としても、判者としてもかかづらいが多かつた中に自然に自得したのである。

短歌が短歌として独り歩きの場合は、まさに歌合せと百首歌であった。屏風歌もそうではあるが、文字による形態の美しさ、添えられる絵などによる造型美の中に言語も音調も意味もオーケストラから独立しかねるものであって、歌そのものの住む場ではない。定家も屏風歌を多く詠んではいるが。

短歌はむしろ読人しらすのごとく、作者さへうしなつた文芸作品として独り歩きをさせたいのであった。定家が撰じた近代秀歌自筆本においては、すべて作者を省いて八十三首は列記されている。詠歌大概につけられた秀歌体大略においても、百三首が、すべて作者をあらわすことなく連記されている。

かつて志賀直哉が、昭和初期に出版された改造社版の現代日本文学全集の志賀直哉篇のはじ

めに、自分の作品が、後の世まで残り、作者の名さへ知られずなつて、この中の一篇でもなお読まれることでもあつたらどんなに喜ばしいことであろう。といい、かの百済観音がその作者は歴史にうづもれて失われても、まざまざと生命をもちつづけるように、という意味のことを書いていたのに、私は感動したものであつたが、定家のいのちと愛した和歌が、なまじい作者の明らかなのさえもいとわしいのではなかつたか。

名さへも明らかにしない歌集が編まれたら、それが実現されたらと思つていたのではなかつたらうか。定家に一つの機会がおとづれた。それは、定家の嫡男為家の妻の父である宇都宮入道頼綱が、定家の山荘をしばしば訪れて、嵯峨の山荘の障子のために色紙の揮毫を懇望したことによつてであつた。定家はすでに七十四歳の老齡ではあつたが、そのいくほどもない前に新勅撰集を独撰して、歌を見る目にくもりはなかつたし、文字については、誤ることのない正確さに自信があつた。

明月記の文曆二(一二三五)年五月十七日の条に、

予本自不知文字書。嵯峨中院障子色紙形。故予可書由彼入道懇切。雖極見苦事。慙染筆送之。古來歌人各一首、自失智天皇以來、及家隆雅經。

とある。この時撰歌染筆を依頼されて、年来の考えを逐げる思いが内心をゆすぶつたことであらう。かねて百首や歌合における歌の在りよう

を、一つのまとまつた形、歌の数は百首、それに作者を百人とする。歌合せにおける多人数によつてあらわす綜集のおもしろ味を、百首の、従来一人の作者によつて行われていたのを、多人数の趣を取り入れた多人数百首の構想は、百首の多詠と多くの歌合に加り、時に判者をつとめた定家が新勅撰独撰の余勢を馳つて、空前の試みとして心に浮んだ時、ひそかに胸のおどるを覚えたであらう。そして、かつて撰んだ二四代集、近代秀歌、秀歌体大略などを手許において、歌人を撰び、歌を勸えて歌人の冥加にかけて撰んで宇都宮入道に染筆の色紙形をおくつたのであらう。

百人一首は定家の撰として、時には安藤為章が年山紀聞に、選歌は宇都宮入道で、これを定家に染筆を乞うたかと疑い、末尾に後鳥羽院順徳院をおくのを、明月記の記事とちがう処から、のちに次第を改めたのであらうか。といい、真淵や景樹はこの説を支持したというが。染筆だけを頼むというは、いりほがの説であらうと、久曾神昇氏の云つてゐるのは、正しいと思われ。その撰定を見ても定家の撰であることは間違なく、前人未踏の「百人一首」方式の構想は、そんなに生やさしく生れるものではない。定家の作家生活を通し、歌を愛し歌のひとり立ちに寄せた関心と執念の深さにして初めてこれを遂げ得たと云つてよい。

近來「百人秀歌」―嵯峨山荘色紙形、京極黃門撰が有吉保氏により、発見紹介されてから百人一首成立に関する論が盛んに行われ、小高敏

郎氏、久曾神昇氏、石田吉貞氏、樋口芳麻呂氏等のすぐれた論考が発表され、「御所本百人秀歌」の摸本も刊行された。

結論的に言つて、百人秀歌は百人一首に先行して成立した。百人一首は、百人秀歌の改訂によつて成つたものである。その間の事情は諸家の論があるが、百人秀歌には「嵯峨山荘色紙形」とあり、百人一首には「小椋山荘色紙歌」とある処から、久曾神氏は、明月記にある、染筆して宇都宮入道におくつたのは「百人秀歌」で、定家の小椋山荘に私的に書いた色紙が「百人一首」であり、世に行われている、いわゆる小倉色紙は、定家自筆の色紙で、これは百人一首を染筆した色紙で、「百人秀歌」、つまり嵯峨中院山荘にあつたらう処の色紙は伝えられていない。然も「小倉色紙」には後鳥羽院の歌さへもあるのは、何よりの証拠である。

「百人秀歌」に後鳥羽院、順徳院が無いのは、当時の社会情勢で、鎌倉幕府をおもんばかつたもので、宇都宮入道が、北条氏の縁辺であり、かつて幕府方の圧力で新勅撰の撰進に両院の歌を撰入し得なかつた事情からも、場を考へてのことであつたとされてゐる。すなわち、百人一首では、百人秀歌にある。

夜もすがら契りしことを忘れずは恋ひむ涙
の色ぞゆかしき 一条院皇后
春日野のしたもえわたる草の上につれなく
見ゆる春のあわ雪 権中納言国信
山ざくら咲そめしより久方の雲居にまが
ふ滝のしら糸 源 俊頼朝臣

紀の国のゆらのみ崎にひろふてふたまさかにだにあひ見てしがな 権中納言長方の四首がなくて

うかりける人を初瀬の山おろしよはげしかれとは祈らぬものを 源俊頼朝臣

人もをし人もうらめしあぢきなく世を思ふゆゑにも思ふ身は 後鳥羽院

百敷や古きのきばのしのぶにもなほあまりあるむかしなりけり 順徳院

の三首とさしかえられている。歌数で、百人秀歌は百一首、その中から四首を省き三首加えて百首になったのが「百人一首」である。更に言えば、俊頼は歌がさしかえられ、一条院皇后、国信、長方は、歌を省かれ、後鳥羽院と順徳院は新しく加えられたことになる。これらの事情は諸家の研究に俟つことにする。

これは諸家の指摘もあることながら、百人秀歌も百人一首も、その排列について、歌合せ的な考慮が、年代順の順列とあざなうて工夫されていることである。現象的な考証を聞くにつれて、定家の内心にある理想のあらわれであることを思うのである。歌の一人立ち、歌の裸身のすがたをあらわす二つの場、歌合と百首歌、それを一つにして、さらに興味あることは小倉色紙が、歌のみを書いて作者を記さないことである。かつて近代秀歌や、秀歌体大概に於いて行ったように、歌を、作者から開放して、歌そのものだけを表出することである。古来の歌人各一人のうち一首であり、作者は古来の歌人の一人ではあるが、あえてその作者の名をさだか

にしない。よしそれが世にもはやされている歌にしても、そうでなくても。そうした歌の色紙百枚、次々に押されて一処に会するのである。定家の心情思うべきである。定家の文字は、その道にくらい私などには盲の垣のぞきではあるが、風格をそなえた雅致を感じるし、校合等に誤のなかつたという定家の、連綿草を用いない書法はむしろ近代的思想であると思つて、奥書なども謙虚さの中の豪気な卑下慢さへ思われるのである。百人一首という空前の様式を生み、作者の署名のない百枚の色紙は、久曾神氏の言われるように、嵯峨山荘のために染筆しただけではあきたらず、自家の山荘にも作者を省いた色紙を染筆して、ひそかに心をあたためたのであつたであらう。

私は、幾百年の星霜をへた今日も、「小倉百人一首」が人々に愛されつづけ、歌がるたの様式の中に入つても、かつて定家が望んだように、歌は愛唱され、人々の中に生きつづけて行きつつ、概ね作者を失うのである。「ゆふされば門田のいなばおとづれて」と云つたとて、大納言経信は思はず、「あしのまうやに秋風の吹く」と歌いついで調べの中から情趣がつかまれて、大衆の中に生きつづけているのである。

百人一首の弘布と多人数百首

「百人一首」とは定家は記していない。「百人秀歌」を書き遺している。然し、古来の歌人各一首といっている。定家の胸中には「百首歌」があつたことは勿論である。百首歌は、「百首」

と呼ばれている。「百人一首百首」というべきでもあるが、「好忠百首」では、「好忠」が作者のもので、その百首と理解されるなれば、「百人百首」と云つてもよく、そうすれば百人の各百首、つまりあわせて一万首のものを呼ぶことにもなる。むしろ「百人の一首づつ」という意味で、簡略された呼び名といえよう。応永十三年（一四〇六）藤原満基の百人一首抄に

小椋山荘色紙和歌、右百首は小倉山荘色紙和歌也。それを世に百人一首と号する也。

これをえらびかきおかることは、新古今集の撰定家卿の心にはかなはず……本意とおぼさぬなるべし。されば黄門の心あらはれ難きことを口惜おもひ給ふゆゑに、古今百人の歌を撰びて、我山荘にかけおき給ふ物也。……この百首黄門の世には人あまねく知らざりける。それは世の人の恨をも憚る故也。……かたく密せらるゝにや、為家卿の世に人あまねく知る処にはなれるとぞ。……此百首は二条の家の骨目也。

とある。定家在世の頃は、深く密めていたものが、為家の時代に世の人々のあまねく知るところになったといひ、この書写の時代、室町期には「百人一首」の名で世の中に流布したというのであるが、嵯峨山荘ではなく、「我が山荘にかけおき給ふ物也」とあるのは、嵯峨山荘色紙定家染筆の時点から一七〇年近く経つたことである。この文のように、「我が山荘」とあり、「小椋山荘色紙」とある上は、筆を染めた時から五十年生存している定家は、百人秀歌を訂して、百

人一首として自分の山荘の障子に帖っていたとする、久曾神氏の推定と一致するようである。

とにかく斯うして世に流布したのであるが、すでに頼阿の序文のある抄があり、延文四（一三五五）年の序文のある本をもととしたという「百人一首諺解」によっても、百年少しのあいだに弘く世に行われた。「百人一首」という百首形式は、新しいものであった。ましてや中世以後、歌聖の如く尊崇された定家の撰であれば、安じて寄ることの出来る物であるだけに、注釈書が出来、いよいよ弘布されるのも当然である。また詠歌大概、秀歌之大概、小倉百人一首をあわせて「三部抄」として、歌人の聖典視されて重んじられ、宋祇も道のために見待るべきものは、秀歌体大略、百人一首、秀歌之大概、近代秀歌、未来記等なるべしと老のすきみに云うように、百人一首は重んじられたのであった。百人一首の様式は多人数百首の極限である。一人一首という制限をほどこいて、多人数による百首の結集は、百人一首から思いつかれるものであろう。一人一首でなく、一人では数首を詠み、あわせて百首になるといふ多人数百首の出現は、百人一首に影響されたものである。西行が伊勢神宮に法楽結縁のために諸家に勧進した二見百首は、自歌を百首にまとめた普通の百首であったように、法楽百首は自歌百首歌であったが、「応永二十一年頼証寺法楽百首」（一四一四）は、従来の法楽百首とはいささか異っている。これは一人の作者ではない。堀河百首のように多くの人々の百首の集められ

たものでもない。一つの百首を多人数で詠んだものである。作者四十七人、名のない歌四首、或は四十七人乃至五十一人までになる。一人で五首乃至一首を詠んだものである。以来多人数百首は奉納百首に多く、永享九年住吉奉納百首（一四三七）同十年石清水社奉納百首（一四三八）同十一年同社奉納百首（一四三九）同十三年松尾社日法楽百首（一四四一）玉津島法楽仮名題目百首和歌（一四七二）明応七年長門国住吉社法楽百首（一四九八）など、続群書歌從に収めている法楽百首は、いづれも多人数百首である。一人百首詠は、作者が先で、百首を詠むのであり、多人数百首は百首が先で、これに作者らが歌をうめていくことになる。

法楽百首は一人の作者が、自歌百詠をまとめるのであるから、多人数百首は例外である。然し例外もくりかえされることよって、一つの様式として展開していく。社寺に多人数で一つのもの奉納することは、ありふれたことで、それが太鼓でも猷樹でもよい筈である。考えはそれに添ったもので、百首を多人数で詠む発想につながる。百人一首が多人数で百首を形成しているのである。これには、世話人が出て、結縁のための歌を募り、これを百首に結集するか、相集って詠みあって百首にするかである。それには歌会の場合が考えられる。そうした場合のあらわれと見られるのが、前にあげたうちの玉津島法楽仮名題目百首和歌である。これには文明四年五月御当座とある。当座は歌会の場合つくる歌のことであるから、当然このための歌

会によって詠まれたものが結集された百首なのである。作者は公家武家三十二人、歌会の席上詠百首である。

歌会で百首をまとめるのは、法楽百首ばかりではない。少し時代は下るが、文祿三年（一五九四）吉野百首もある。これは、豊臣秀吉が関白を譲り、淀殿が秀頼を生んでから秀次との間が思わしくなくなった頃の、文祿三年二月二十七日、秀次、家康、利家たちと共に吉野に遊んだ。その折の歌。歌会を行い、題は、花の願い、花ちらぬ風、滝上花、花祝の五題各一首づつ二十人が詠んで百首になる、遊宴に歌会を催すことのすきな秀吉であった。この席には細川幽斉も行を共にして、

春風におほふかすみの袖もがな散らさで花をみよしの山（花の願） 法印玄旨

吹くもなほ花と夢とをさそひ出ぬ風の力や夜半の手枕（花散らぬ風）

滝波のおつとは見えておとせぬや花にまされる水かさなるらむ（滝上花）

一枝になほ榊葉の香をそへて手向ことなる花のいろかな（神前花）

君がため花のにしきをしきしまややまと鳥根もなびくかすみに（花祝）

と詠んでいる。同じ五題づつ詠んでいる。

斯うした多人数百首は、百人一首の影響であらわれ、こういった歌会によったり、或はよらなかつたりした、多人数百首がつづいている間には、天文二十年（一五五一）の三月二十二日という日、將軍足利義輝の江州下向を迎えて、

主客百人、それぞれ題を別つて詠んだ当座詠と思われる江州観音城主六角義実の撰になる「武備百人一首」のように、百人の作者が百首を詠む、多人数百人一首の極限の一人一首百首があらわれ小倉百人一首と構造を同じうする百人一首があらわれるに至ったのである。これが異種百人一首の誕生である。

異種百人一首の出現

百人一首が、詠歌大概、秀歌之大略と共に、三部抄として歌人の間に、聖典のごとく重んぜられて来た。これらを見るに、詠歌大概は、本文は五百字ばかりで、歌詠の心得をのべた上に、秀歌体大略として、一〇三首の秀歌をあげて作者を記さず、秀歌之大略(秀歌大体)は四季恋雑にわけて一三首を挙げて作者名をあげない。百人一首は百人の秀歌を選んで作者の名をあらわしている。定家は、詠歌大概に

和歌に師匠無し、唯旧歌を以て師と為す。
心を古風に集め、詞を先達に習はば、誰人か之を詠まざらむや

と云っているのは、定家の本心であろう。選歌は鑑賞批評の結論で、これほど具体的で、のびきならないものはない。うちつけに歌の中に入っていくためには、作者名など無い方がどれほどよいかわからない。「小倉色紙」は作者を記さない一枚一枚であるが、成書の「百人一首」は作者名を出している。いづれにせよ「百人一首」が、和歌の聖典視され、そしらば冥加あるべからずとまで尊崇された定家の創案にかかる

新形式の百首歌、定家創案にかかる百人一首に擬した選歌をまとめることにたやすく踏みきれなかったのではなからうか。

二条良基(一一三二—一三八〇)は、百人一首成立後一〇〇年ほどの人、関白太政大臣にも昇叙された殿上人で公家の有職、学芸に精しく、和歌、連歌において宮廷と地下をむすび、「菟玖波集」を撰び連歌道を確立しようとした。頼阿、了俊ともよかった。連歌の論書、歌論書も多い。その良基の撰んだという

「後撰百人一首」(文化竜集丁卯夏新稿)が、大坂書舗柏原屋清右衛門、播磨屋喜助板行によって、板本の形で突然あらわれた。良基歿後からでも四二〇年後に、その間文献にもあらわれず、古写本もなく、突如としての出現にまづ真偽が疑われた。序に

建武の乱れより君臣上下心々に九重を出でて都近きしるべの方へ退き給ひける中に、後普光院摂政殿下は嵯峨の中院に世の塵をさけおはしましたける時、京極中納言の跡にやならはせ給ひけむ、天曆の御門より其の頃の君臣に至る迄を思し出づるままに、時代の後前をもついでず、み心によしと思す儘をかい集めおかせ給ひけるか、其の後六首むしばみけるを、後の中院関白顕実殿下補はせたまひて、後撰百人一首と名づけ給ひけるとなん。此の本は、彼の御家の大夫の許より、長門阿武の春日の祠の宮司波多野某が家に伝たりしを写し得て梓にちりばむることとはなりぬ。とあり、さし絵に、順徳院建保六年八月十三日

中殿御会の図を出し、更に、

みけつ国にはのわたりに住む人の、後撰百人一首といへる書に、秋の田の鳴のはしがきたうべよと乞へり。こは良基の大臣の御撰とかや言ひ伝へて、うみをなす長門の春日の宮司の家のひめおきしふみとぞ、そもそも百つ人の歌を集めしは、定家中納言の賢寂入道の求めに随ひて書いつけ送られしをはじめとして、後世にもかれこれ集めし人もあれど、彼のおとどの撰びは、いそのかみ古りにし頃より、いかがさき如何なることにか聞き伝へざりしか、今なん吳竹の世におほやけにもなりなば、誰も誰も、玉くしげ底たからとて、木綿花のめで栄えて、此たばかりをも、谷くぐのを渡る極みまで、よろこびにおもひつづ言の葉の露のふるごとを、軒のしのぶのしのばざらめやも、寛政申のとし霜月の中の二日、おほきみつの位さた直しらす。

とある。虫くい歌があったので、顕実が補ったというが、どの歌とも云っていない。頼阿や了俊のものにも、その後のものにも絶えて見えな。中島悦次氏、吉田幸一氏の説により偽書ということが定説になった。(新百人一首と重複があるばかりでなく、同歌もある。新百人一首の撰者がこれを見なかったとは思われない)

後撰百人一首を偽書とすると、常徳院撰「新百人一首」こそ、小倉百人一首の型をうけて撰ばれた最初のものと言えよう。明暦三(一六五七)隴月、谷岡七左衛門の刊本があり、跋に百人一首和歌とて、大津宮そのかみ、かりほ

の露のふるごとまで、承久のももしきの軒忍ぶのことの葉に至るまで世の中に伝はれるは、京極中納言みづからの山ざとの障子におされたるを、今の世までのもてあそびとせるならし。しかあるを、この比、柳の糸のよりによりに、其の外の歌仙の歌ども更にいることなる紙どもに書きいだしたるを、見たてまつるべきよし、仰せごと侍りし。御筆のいきほひ、墨つぎ此の世のものとも見えず。めなれぬさまなど、心言葉の及びがたく、是れぞ千とせの宝にも伝ふべきと、愚かなる心のうちにも有難く思ひ奉りて、さる後えらびいだされたる、げにたぐひなくめでたき御事に侍れば、ひろく伝へまほしとて、御中かきを申し出してまかでたりし。又右の文箱壁の中にもおさめおき侍るべきはたやすくひらきみるべきにしあらざれば、さらにかたのやうに写しおきて、これを明けくれ枕ことにすべしとや。

小倉山時雨ふりにしいにしへのあとにもこゆる言の葉ぞこれ

文明十五（一四八四）年神無月下四日ともし火のもとにて筆を染め果りぬ。沙門判

本云、是は常徳院殿御作撰云々、跋は聖護院乃准后道興被遊之由、云々、以左中弁兼秀本享祿二年（一五二九）九月十三日、書写之終功畢

永祿九（一五六六）年十二月書之
這新百人一首、以中院内大臣通村公芳翰令

刊行之也。千時明曆第三天丁酉（一六五七）臘月中旬

谷岡七左衛門刊行

とあるもので、撰者は常徳院足利義尚、この奥書の文明十五年十月二十四日にはすでに成立していたのである。定家嵯峨中院色紙の染筆より二百五十年を経ている。そしてこの時代には、百人一首は「今の世までもてあそびとせるならし」とあって、広く世に行われるようになり、はじめて異種百人一首が現われたのであった。

義尚は足利九代將軍、父義政の好雅好学をうけて、武事にたけ、学を好み和歌をよくした。実隆以下の歌人を重用し戦乱により沈滞した歌壇に活気を与えた。少壮果敢な文武の將軍、二十五歳で陣没するまでの绚烂たる生涯であった。この新百人一首は、彼の二十歳の時の撰にかかる。慎重さはこの年九年、新百人一首の稿を實際に示しその閱を請うている。新百人一首の、「新」には一つのきおいが見られる。小倉百人一首が、「百人一首」として独行していたのに、新しい百人一首という意味をこめたことであろう。成立年代の明らかな異種百人一首の嚆矢ということが出来よう。明曆五年の刊行は、異本百人一首での最初のものである。

室町期には、更に「武家百人一首」が撰ばれている。撰者と成立の時が明らかではないが、撰入された武人は、清和源氏の祖六孫王経基から足利義澄までを収め、十二代の義晴以下の將軍を収めていない。すなわち、最後の五人は、義政、（八代）義視（義政養子）義尚（九代）義植（十代）義澄（十一代）となっている。義

晴が將軍になった大永元年（一五二一）前後の成立であろう。それぞれ法名別号を附している。新百人一首成立以後四七年になる。然し、江戸初期の写本の跋に、

やまと歌はわが国の風俗として皆人のもてあそびとなれり。武門の身にしては、弓馬のいとまみしげく、外の学びに心をよするいとまなからまし。されど古今集の序に、貫之が書けることばに、たけき武士の心をなぐさむるは歌なりといへるためしに、源平二つの家のみにあらず諸々の武將和歌を連ね侍るも多ければ、京極黄門の小倉山荘の障子に書きかけける数になぞらへて、武士百人の歌を一つづつ書きて、武家百人一首と名づけ侍るにこそ。然あれど歌のよしあしを定むるにはあらず、あるは撰集に入りても歌の数すくなく、一人一つ二つのたぐひ多し、或は仮名文に見え侍るなどを、目にふるるを幸にして、唯武將の名高きをもらさず、歌のほまれある人も捨てがたく、武士の百の名を願しはべらむためならむかし。万治庚子（一六六〇）仲冬とある。この奥書は、書写の年月を記したものである。姫路城主榊原忠次が、武家百人一首に註を加えた、「武家百人一首抄」を著したことを誤伝して、榊原忠次撰として、尾崎雅嘉が群書一覽に載せたことから、榊原忠次撰とされて来たが、写本の奥書の書写年月、万治三年さへ榊原忠次は生れていない。静嘉堂文庫蔵の武家百人一首の欄外書入に、

松井幸隆日、武家百人一首といふ物あり。撰

者誰にやと、野々宮殿へ伺ひしところに、それは知らず。取用ひが難きものにして、新百人一首さへ信用しがたしと仰せらる。

とある。幸隆は通茂の門、寛永年間(一六三〇—四〇頃)の人で、古来擬われた集ではあった。猶、この武家百人一首の奥書に

寛保元酉年(一七四一)皐月十日、七十七翁 静山、右百首不知誰人之撰。今熟見之、慕於上古風、此道之蘊者撰定歟。不可見過容易之和歌也。因而動老筆書写者、嗜此道者必可為座右之翫也。

とあって、珍重される筋はあつても、撰者については知られなかつた。武家百人一首は、概ね勅撰集から撰び、新葉集、平家物語、太平記などから十四首撰入されている。この本が板本になつたのは、寛文六(一六六六)丙午初冬吉且谷岡七右衛門板行で、異種百人一首の板本になつたものの二番目である。前掲の奥書なども、刊本の出た後のことである。この本がよく普及して、寛文十二年には重版され、更に元禄十六年(一六九三)には、板元をかえて林正五郎、菊池喜兵衛刊となっている初版から東月南周書、菱川師信画という。(師宣は正徳四年歿というから、寛文六年は、彼が三十歳前後の画である)

武家百人一首が、榊原忠次の撰であるとされたのは「群書一覽」の失考から出たもので、深く穿鑿することは出来ない。それ以前に撰者を明らかにしたものの所見はない。ただ不審なことは、和歌文学辞典の文明二年の項に「加賀守

護富樫政親と妻自殺(続武家百人一首作者)」とあるのを、「続武家百人一首」の作者とすれば、それに先行する「武家百人一首」があつた筈であり、作者の一人とすると、どういふことになるか。武詠聚玉中にある「続武家百人一首」は後世のものと思うが未見のため詳しくしない。とにかく、「武家百人一首」は、その作者や内容から見て、足利幕府に近い人が撰んだものである。性格がちがうこともあるが、新百人一首とは、人も歌も重複していない。室町期の成立でないという証拠はない。

次に、「武備百人一首」が近年跡見短大に架蔵された。これは、「天文二十(一五五一)年江州観音城、武備百人一首」とし、はじめに、江源武鑑書抜

屋形、將軍家を為賞武備の百首を始め給ふ。彼の歌の題は、儒学兵書の内容とする処の語、武具に至る迄を定め、歌の柄その道によく適ひたるをよしとす。末世の物語に、百首とも日記に載す。

天文廿年三月廿二日、於江州観音城、武備百人一首の和歌、判者なし。其の將の心に任せ武備を用ふ

とある。歌会をひらき、集った將士たちに各一首を、武備、兵法、五常、七計などの題で詠んでいる。

音もなく香もなく道の至れるはただそのまゝの有明の月(一以貫之) 將軍義輝公
善をつみ悪をしりぞけ世を経なばもとよりありし玉は秀でむ(明德至善) 管領義美

を巻頭に、一人一首詠を集める、当時武家の間にあつた教誡の歌の調べで、小倉百人一首などは頭におかれていない。

会者定離生者必滅知りぬれば何を悦び何なげかまし(生死) 戸田則綱

と漢字も想もうちつけで

一たびは敵をおこらせ一度はさけては不意の折を打つべし(卑而驕之) 三井実忠

など兵法に関するものなどもある。

鐘も鳴り鳥も聞こゆる東雲にわかれてかへる 曉ぞうき(鐘) 久徳氏三

のような、後朝の歌めいたものは、例外である。道歌、教誡歌、兵法武備の歌で、無器用な歌の中に武士たちの教養や卒直なもの考え方なども思われる処がある。同題のものもあり、極めて自由な題をとって詠まれている。和やかな当座の雰囲気も思われる。歌が、ほとんど無文の武士達の間で、こうした形で浸透していったことがうかがわれる。

巻末に「武備百首終」とし、更に、將軍家甚だ興に入り給ふ。則ち、御所持あるべしとて、右の短冊どもを召しあげらる。連衆者、畠山家、細川家、武田家、朝倉家、長岡家、右の五人の外は、皆江州の面々。屋形の族、或は旗頭等、又は長臣兩執権、其の外城主の家札等也。

とある。一座の様子を書きとどめている。これにより、歌会は、おそらく宴席につづいて行われた和やかなものであつたらう。斯くてこの百人一首は、成立の時も、成立の事情もよくわか

るようである。

以上によって、室町期に成立した三つの異種百人一首をあげたが、おそらくはこれ以外にかなりの数の異種百人一首があったであろうと思われるが、今はこの三種だけが世に知られている。そしてその中、武家百人一首、新百人一首は、それぞれ江戸初期に刊行されたが、武備百人一首は、跡見短大紀要第九集に紹介されたのがはじめである。

I 新百人一首 足利義尚撰

II 武家百人一首 撰者不詳

III 武備百人一首 六角義美撰

の室町時代成立の三つの異種百人一首の共通していることは、小倉百人一首と同じく、作者一人の一首づつの和歌を結集して成ること、これが異種百人一首の本格である。然しIは、あくまで秀歌を集めて、小倉百人一首のあとを継ぐとしたものであり、IIは作者を武家に限定して秀歌を集めようとした、作者限定を立前とするもの、IIIは、かつて多人数作者の、歌会における百首を集める形式を追って、百人の作者の各一首を集めたもので、内容の題が武備に求心的な要素をもっているものである。

異種百人一首の展開

江戸時代に入って、世は太平となり、文字ある者も増加し、民衆の中に購読者が増加するの平行して、出版技術の進歩が、商業主義にも合致して、多くの出版物が出るようになった。すでに百人一首の普及につれて、遊技としての

歌かるたによって民衆の中に小倉百人一首が浸透していった。一方では読みものとして、絵入の百人一首が行われ、異種百人一首の板行もそれにつれて多く見られるようになった。「百人一首」を称するものを少しくあげてみる。

1 新百人一首 明曆三 (一六五七) 刊

2 武家百人一首 寛文六 (一六六六) 刊

3 犬百人一首 寛文九 (一六六九) 刊

4 古今四場居百人一首 元禄六 (一六九三) 刊

5 万葉百人一首 元禄一二 (一六九九) 刊

6 どうけ百人一首 享保頃 (一七一六) 刊

7 江戸名所百人一首 享保頃 (一七一六) 刊

8 今様職人百人一首 享保頃 (一七一六) 刊

9 興歌百人一首 明和八 (一七七二) 刊

10 歌誹百人撰 安永四 (一七七五) 刊

11 勇猛百人一首 安永七 (一七七八) 刊

12 女房百人一首 安永九 (一七八〇) 刊

この間には、まだ刊行されたものもあるであろうし、徳川光圀の撰の、「新百人一首」(室町期のとちがう)のように写本で伝わるものもあるであろうが、今は、明曆から安永まで、約百二十年ばかりの間に刊行されたものについて考えてみる。

はじめの1と2は、室町期成立のものが、江戸に入って刊行されたものであるから除外するが、これらが刊行され、重版されていったということは、新しい百人一首、小倉ではない異種の百人一首が迎えられる時代になっていることを物語るのである。12を除外して、他の十種のものを一言づついうと、

3 犬百人一首の犬は、いぬ山椒、いぬ黄楊、犬さむらいなどの犬で、似て非なるものをいうので、看板から偽せものをうたった処に、江戸人の横着な洒落がある。

はり過ぎてなくれにけらし白ふくに衣きるて
ふ尼のなりさま 女郎てんじん

は、勿論、語呂あわせ風には、

春すぎて夏来にけらし白たへの衣ほすてふあ
まのかぐ山 持統天皇

をもじったもので、作者は、小倉の百人を名前

までもじりつつ、一人で詠んだもので、百人一

首でなく、一人百首。つまり百首歌であり、百

人一首とは本質的に違うのである。然し斯うい

うものも異種百人一首と呼ばれているが、「百

人一首」の本質からはそれたものである。

4 古今四場居百人一首は、役者の名を出して、

作者に擬し、もじりの歌を出す。

あさぎ帯かるたむすびのとけぬまに我がかた
びらは汗にぬれつつ 中村勘三郎

あきの田のかり穂の庵のとまを粗み我がころ
もでは露にぬれつつ 天智天皇

天智天皇の歌と頭韻をあわせたり語呂あわせを

している。作者百人を擬しているが、実際は一

人の作者の作。

5 万葉百人一首は、万葉から百人の秀歌を撰ん

だので、これは正統な異種百人一首。

6 どうけ百人一も、7 江戸名所百人一首、8 今

様職人百人一首の三種、作者が同じ近藤清春

で、画並に作。共通なのは、小倉の作者をその

まま出し、歌は「本うた直し」と称して、

秋の田の刈りほすまでにひよりよくわが子どもを楽にすこさむ

天智 天皇

秋の田を刈りほす稲のひまをえらみ六阿弥陀へぞまあり行きつつ

天智 天皇

軒の板かりほぞあなののみをえらみわがでしどものせいをだししつつ

天智 天皇

という語呂合せ的な替え歌678をつくつたものである。

9 興歌百人一首であるが、興歌は狂歌のことで巻頭撰者度量の一家言がある。百人一首様式を忠実に襲って、百人各一首の狂歌を取めている。これも異種百人一首。

10 歌誹百人一集は、写本も多く伝わり、歌の出入などもあるが、百人各一首である。

11 勇猛百人一首は、武家百人一首の作者入替などをして、畫像入り読本風にした小冊で市販されたものである。略註があつて、この種のものでは古い部類に入る。

12 女房百人一首は、撰集物語等から閨秀の歌人の歌を抜き、二十一丁の小冊である。

右は、江戸初期から中期の前半までに、刊行された異種百人一首。写本で伝わるものを除いたのは、民衆の中に伝播するのは、刊本による処が多いので、民間における異種百人一首の型態がどのような展開を示したかについて、およその型が出揃っていることもあつる。茲で、異種百人一首の様式分類が可能になると思うのである。A Bにわけられ。

A 1は、小倉百首における撰歌のごとく一人一首の和歌を百首撰び集めたもの、

新百人一首、武家百人一首、万葉百人一首、勇猛百人一首、女房百人一首

A 2、和歌の一体である狂歌を、小倉百首の如く、一人一作百を撰んだもの

興歌百人一首

A 3、和歌に限定せず、俳句などを混じて一人一作百を撰んだもの

歌誹百人一集

B、は小倉百首を本歌として、語呂あわせ、又は趣向をとって狂歌体に翻案して、百人一首に擬したもの。これは、百人一首の基本的な条件である「百人の作者」という条件にはまらないので、異種百人一首の中に加えるべきではなく、むしろ擬態百人一首とでもいふべきものであるが、世に最も多く行われ、異種百人一首と呼ばれているので、ここに取り上げたのである。本歌取が、本歌を知らない者にとっては、作者の想は通じないのであるように、百人一首の歌を知らない者にとっては、そのおもしろ味も全く理解されないものとなる筈である。この種のもので、最も古く行われた犬百人一首が、かなり奔放に本歌をもじり上げており、その作者名まで語呂をあわせていること。これが読者に十分通じることとを考慮しなくては、これが出版される筈はない。

明曆から寛文にかけて百人一首の講義又は聞書等の見えるのは万治元、百人一首帰説抄(祐海)百人一首御講訳(後水尾院)に貞徳の頭書を附して百人一首抄刊(寛文二)百人一首基箭抄刊(延宝一)などあるけれども、その講釈に

よって庶民に広がったとは思われない。最も関係のあるのは歌がるたである。歌がるたは、ウンスンかるたから思いつき、貝合せとの習合で、小倉百首が歌がるたと名づけられて、江戸の大奥や、これを習う諸大名の奥で、遊ばれたというの、かなり早い頃からであったろう。寛文七年の川柳に

声あはせ読むやかはづのうたがるた

というのがある由であり、元禄になると、家なみにみやこ女の歌がるた

と普及していった。上行へは下これを習うというか、早い速度で小倉百人一首かるたは普及していったことであろう。京羽二重貞享二年(一六八五)刊には、(歌がるた所、鳥丸五条下ル町井上山城)とあつて、すでに、かるた製作の専門の店が出来たくらいであるから、かるたは一種のブームのようにして庶民の中にも普及していったことであろう。

歌がるたは歌を暗唱せねばならないのであり、和歌はリズムにのせて暗唱し易いところから、童幼の間にも、百人一首が、浸透していったのであろう。そういう下地の中に入ることが出来ればこそ、もじり歌、本歌直しの新分野が、駄洒落好きで、語呂合せごのみの庶民の中に愛されて、続々その出版を見ることになったのである。すなわちこれで、

B 1に分類されるものには

どうけ百人一首・今様職人百人一首・江戸名所百人一首

は共に、近藤清春(助五郎)の作並びに画であ

る。作者から見て、享保年間の刊行であると思われる。図書総目録によれば、どうけ「百人一首」は、寛文三年刊とある本の見える由であるが、いかがと思われる。

これらは、小倉の作者を出して、歌がもじり歌をあげるもので、形の上では名前だけが小倉に等しいのであるが、歌がもじりである。これに追従するものはおびたしい。これが世にうけたとみえて、江戸名所、今様職人などに仮托して、本歌なおしと銘打ちながら、青春の作が続刊されたのであろう。

B2はB1三書に先だつ刊行された

大百人一首

である。前に云ったように、にせもの百人一首と自ら銘を打って著作されたものだけに、百人一首の作者名までもじっている。やや悪ふざけだが、これも後続するものがかなりある。

B3に属するものは、歌はもじりであるが、作者にあたる処に原歌に付すものではなく、実在の他人の名を出しているもの

古今芝居百人一首

がこれである。歌はもじりで、人は役者の名を出して、実在の人に歌を仮托して一人の作者が全部を詠んだものなのである。

以上にあげたは、江戸初期から中期までの間に刊行されたものを挙げたが、これらが異種百人一首の、この時期に刊行されたほとんどであって、百二十年ほどの間に、わづかに十二種、然もそのうち二種は室町期の成立であるから、百十年間に十種の刊行を見るだけであること

は、けして多くの異種百人一首が出たことにはならない。然しこれ以後、江戸後期から明治初年から廿年代にかけては、その数数百をこえる出版が行われたのであった。然も江戸初期にあられた十種の異種百人一首のあらわしている個別は、その後のものをほとんど収めることが出来るようである。再び総括すれば

A、一作者一首（又は一句、一作）を百人集めたもの、つまり、小倉百人一首を別格として、これと並ぶ様式による撰集である。

更にこれを内わけすると、
(1) 本格的に、百人の一人一首づつの和歌を撰して結集したもの。

更にくわしくいうならば、撰出作者に限定を加える「武家」「女房」とか、「現存歌人」「万葉集」とか、題材に制限をおく、「釈教」「花」などの百人一首を含む。

(2) は一人一作ではあるが、和歌以外の詩形、俳句、漢詩、など文芸作品の単独撰集又は混合したもの。たとえば、百人一句、百人一詩、歌誹百人集などというもの。

(3) 百人の和歌でなく、狂歌を撰した百人一首、江戸時代の庶民の間には狂歌が盛んに行われて、狂歌の百人一首は全国的に行われた。

次に「××百人一首」と称してはいるが、百人の作者をあげていてもまことは歌の作者ではなく、百人の人をわかちかけ各一首一人の作者が詠んで、百人一首に仮托するものである。正に「百首歌」ではあるが、百人一首の姿をし

たもの、又は、小倉百人一首の作者を出し、歌だけを本歌取りのようにもじったもの、それらは一作者によって著撰されたもの。これも百首歌で、小倉百人一首の擬装である。更に百人一首の作者名までもじって出すもの、

B 一人の作者により百人の歌がよまれ、百人一首を擬装するもの。（本質は百首歌）

(1) 百人一首の作者をそのままにして、歌をもじりにしたもの。（本歌なおし）

(2) 百人一首の、歌も作者名ももじった、擬装百人一首、一作者の歌詠、多くはもじり歌

(3) 作者名の如く人名をおいて、百首歌を詠むもの。あたかも史詠百首のようなもの。作者としてその人を出して詠む偽百人一首。作者と歌を向うにまわし、詠んで作者名のところ、百人一首の作者をかけたもの。

これで大方の分類は出来るのである。要するに、Aに属するものは正統な異種百人一首と云い得るけれども、Bは、小倉百人一首の擬装で、外国語訳の小倉百人一首に、むしろ近く、もじりの網をくぐった小倉百人一首で、そういう意味では異種百人一首と小倉百人一首の間にあるものとも言えよう。それは、註釈や、外国語訳が一人の手によって、小倉百人一首に、註釈を加えたり、外国語に訳されたと同じく、もじり歌、本歌なおしなどは、一人の手によって、小倉百人一首を、語呂合せ的に改作された結果になるからである。（未完）